広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT　実行委員会

伝統文化・藍染×サーフィンを融合

永原レキ　徳島県／海部藍プロダクトデザイナー

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のものづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家／東京大学教授、グエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクト完成させた。

1月18日、プレゼンテーションにて

エリア・コンサルティングにて

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。徳島県選出の匠、海部藍プロダクトデザイナー・永原レキさんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザーの
小山薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

ライフスタイルから生まれる発想

永原さんにとってライフスタイルであるサーフィンと自身の生業である藍染を掛け合わせることは自然な流れであった。3年前くらいから自分で使用するサーフボードに藍染の布を取り入れたものを今回のプロジェクトでも共同制作した303 SURFBOARDSさんと一緒につくっていた。

ファブリックをサーフボードに入れ込むという技術は、以前からハワイアンキルトなどハワイの伝統的な布をサーフボードの中に挟んでつくっているのをみて、藍染でも可能ではないかと考えていたという。

四国は八十八箇所遍路文化が根付く。永原さんは、その文化をつくったとされる空海が室戸岬で悟りを開いた時に洞窟から見た景色が海と空という景色だったことから「空海」という名前をもらったことを知る。サーファーが波乗りをしている時に見ている景色が空海が見たそれと同じであることに共通項を感じ、これまでもその共通項を表現した藍染製品をつくっていた。

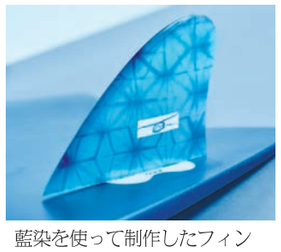
今までにつくったサーフボードは水色と青色2色の帯状の生地で水平線を表現したものを、ワンポイントとしてサーフボードに取り入れたものだった。サポートメンバーから「コンセプトはよいがインパクトにかける、もっと大胆に取り入れるとよい」とアドバイスを受けた。

大きな生地になるほど染色作業は大変となるが、あえて普段使用する生地の何倍にもなる大きな生地に挑戦し、サーフボード全体に藍染を取り入れ、インパクトを持たせた。

ファブリックとなる藍染は染め時間を調節することで出る藍の濃淡を利用し、「海」と「空」、「水平線」を表現している。サーフボードの湾曲する部分は生地がしわになりやすいため、手前で生地を切り、湾曲しているところは樹脂カラーにした。実際に、サーフボードを水平線の見えるビーチに立てた時、強烈なエネルギーを感じたという。

完成プロダクト「空海藍Surfboard」

1月18日、プレゼンテーションにて


藍染を使って制作したフィン

1月18日に行われたプレゼンテーションでは、スーパーバイザーである小山氏より「地域の自然や文化をライフスタイルに取り込み、新たな表現をしている。僕もサーフィンをしてみたくなった」と、注目の匠として選ばれた。

伝統文化を守り自然環境を守る

サーフィンがオリンピック種目になったこともあり、スポーツとしてもカルチャーとしても世界中で注目されている。

「サーフボードに藍染を取り入れることで藍染が人目につく機会が多くなり、知ってもらうきっかけになるかもしれない。自然環境を大切にする気持ち、自然にも人にも優しい藍染という伝統文化をサーフィンを通して伝えたい」と永原さんは話す。

海を越えて藍染のサーフボードの展示や、染料となる藍の葉を持っていき、海沿いの地域で藍染の染色ワークショップをしたり、そのサーフボードで世界中の海でサーフィンを楽しんでもらいたいという。また、海外からも海陽町に来てもらい、藍染の栽培や染色の現場を体験してもらえるような流れをつくることを目指す。「徳島の海が好きな人、徳島の海でサーフィンをしている人にとってサーフボードに藍染を入れるのがスタンダードになるくらいに定着させたい」と語る。

藍染製品は、化学薬品を使わずに天然の素材だけで藍の液体をつくり、植物由来の素材を染めてつくる。藍染は見た目の美しさだけではなく、植物由来ゆえ体に有益な影響があり、自然の原料で製造することでふるさとの自然を守り、サーフィンにとって大切な海を守ることにもつながる。

今回、このプロジェクトに参加して、レクサスというブランドの名前の大きさやプロジェクトに関わる意味の大きさを感じている。TAKUMI PROJECTの徳島代表になることで、今まで関わることのなかった方々と出会うことができ、興味を示してくれたり、仕事を依頼してくれたり、4月からの独立の後押しとなっているという。

現在、永原さんはこのサーフボードに込めた想いを伝える場所づくりに取りかかっている。制作スタジオとカフェ・ギャラリーの混合施設だ。「様々な角度から藍染という徳島の魅力を伝えていきたい」と熱く語った。

永原さんの制作風景

永原レキ
徳島県／海部藍プロダクトデザイナー

徳島県海部郡海陽町生まれ。城西国際大学国際交流学科に在学中、全日本学生サーフィン選手権大会で4連覇達成。卒業後は東京・米国・オーストラリアなど国内外で働きながら、サーフィンと音楽と芸術を学ぶ。27歳でUターンし、現在はトータス海部藍プロジェクトの主任。主に染色や広報を担当し、行政や福祉、医療、アパレルなどと異業種交流を重ねながら、故郷や日本が誇る自然や歴史・文化を発信している。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT